

# DOCUMENT

series 160

## Eye

混合交通を観察する

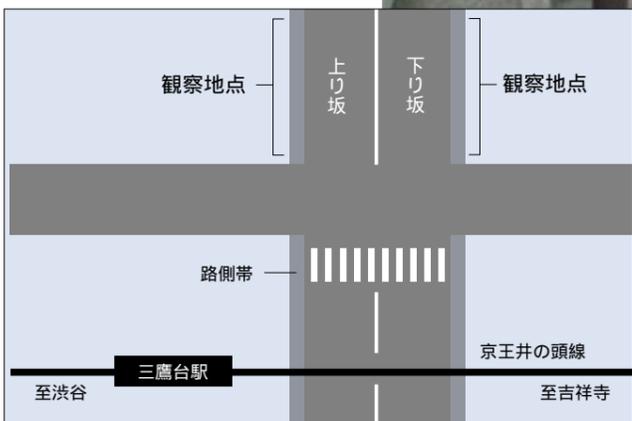
平成14年の人対車両の交通事故件数は8万4934件。その多くは道路を横断中の事故であるが、クルマが歩行者に接触して歩行者が転倒して死亡するというケースもある。このうち歩行者がクルマと対向する対面歩行中の事故件数は4518件(死亡・重傷事故704件、軽傷事故3814件)、歩行者がクルマに背を向ける背面歩行中の事故件数は7807件(死亡・重傷事故1125件、軽傷事故

### ● WHY

## ドライバーは歩行者保護の行動をとっているか?



観察場所 / 東京都三鷹市井の頭1丁目30付近  
 観察日 / 7月14日(月曜日)  
 天候 / 曇  
 観察時間 / 16:30 ~ 17:30  
 観察者 / 4名



6682件)であった。クルマが歩行者の側方を通過しようとするとき、ドライバーはどのような行動をとるか、東京郊外の駅前の路側帯のある道路で、歩行者とクルマの動きを観察してみた。

# 路側帯のある道路を同方向に進む歩行者とクルマを観察する

## 1時間に観察した340台中、歩行者の側方を徐行せずに通過したクルマ123台



### ● WATCHING

## 歩行者はクルマの方が避けてくれると思っ

観察場所は東京・三鷹市の三鷹台駅より南に伸びる通り。線路と交差する片側1車線の道路で、駅からは登り坂となる。観察中は帰宅途中の学生や会社員、買物の主婦に混じって高齢者の姿も見られた。この道路の両端には路側帯があり、歩行者が常にいる状態であった。歩行者は路側帯を歩いているが、対向してきた歩行者や自転車、電柱等を回避するために車道にはみ出すこともあった。

歩行者の側方を通過するクルマの動きは、歩行者と安全な間隔をとったクルマが126台(うち34台は歩行者の直前で回避)、徐行のみ行なったクルマが91台、徐行せずにそのまま通過したクルマが123台。対向車が来ないときには歩行者を避けるためか道路のセンターライン(追

歩行者の側方を通過する際のドライバーの行動

	登り坂	下り坂	小計
歩行者と安全な間隔をとった	79 (34.2%)	47 (43.1%)	126 (37.1%)
徐行のみ行なった	46 (19.9%)	45 (41.3%)	91 (26.8%)
そのまま通過した	106 (45.9%)	17 (15.6%)	123 (36.1%)
小計	231	109	340

観察者は約50m間隔を基準にして判断

越しのためにはみ出し通行禁止の黄線(を大きくまたいで道路の中央を走行するクルマもいた)

多くのドライバーは歩行者を目視して確認し、通過していたが、歩行者とクルマのサイドミラーとの間隔が10cm程というケースも3例確認した。前方を歩く高齢の女性が車道にはみ出してしまったため、この女性が路側帯に入るまで、車両を完全に停車させて回避したケースが1例あった。

また、走行中に携帯電話を使用していたドライバーが10台以上観察されたほか、左ひじをひき掛けなどに置いて片手運転をしている男性ドライバーも目立った。歩行者に注意を促すためのクラクションを鳴らすドライバーはいなかった。

歩行者の多くはクルマが接近しても立ち止まったり、後方を振り向くことはなかった。

### ● PROPOSE

## 歩行者の側方通過時は徐行して安全な間隔をとる

駅周辺や商店街などの人通りが多く、歩道と車道が分かれていない道路では、ドライバーは歩行者と接触しないように安全な間隔をとったり、徐行して歩行者の側方を通過しなければならぬ。だが、徐行することもなく通過する例が多く見られた。今回の観察でも、歩行者とクルマが同じ方向を進む場合、歩行者はほとんど後方を確認していないため、背後から来るクルマの動きはわからない。クルマと歩行者が接近してしまつた道路では、ドライバーは歩行者の行動を予測しながら歩行者の側方を通過してほしい。それには常に周囲の状況に気を配ること、歩行者保護の徹底が必要である。また、歩行者も近づいてくるクルマの動きには十分注意してほしい。

